須賀川の坂 ⑨

岩間（いわま）の坂

西方から
涙橋跡付近を望む

須賀川高校通学門前から、西へ向かって市街地に通ずる坂がある。この坂の途中で、昼なお淋しくなっている場所が岩間の坂（暮谷沢地内）と呼んでいる所である。

ここはまた昔から、市街地の東部に位置する和田地区との往来に欠かせなかった道路として、和田道とも呼ばれていた。

文安年間に起こった、須賀川城主二階堂一族の治部大輔（じぶだゆう）の内紛のため、夫為氏（ためうじ）から離縁された三千代姫が、父の居城に帰る途中、この坂に差し掛った際、両軍が入り乱れ激しい戦いとなる。

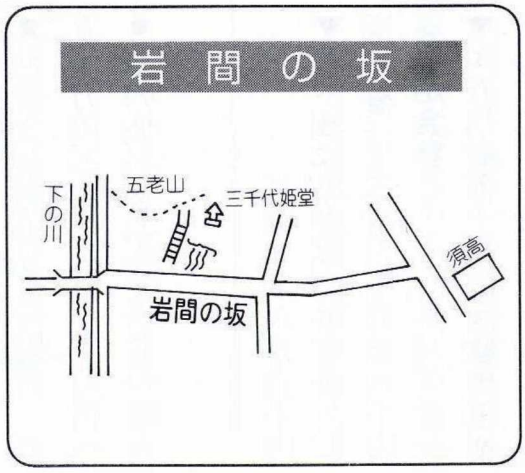
三千代姫は進退極まり、「人問わば　岩間の下の涙橋　流さでいとま暮谷沢とは」と、辞世（この世を去る）の歌を詠んで自害したのであった。

昭和三十年、この歌碑を須賀川史談会で建立。

また、昭和六十三年四月には、三千代姫像を安置するお堂を建てる。

江戸時代には、山伏しの行場として、岩間不動の信仰として今日に続いている。

永山倉造



須賀川の坂 ⑩

座頭（ざとう）ころばし

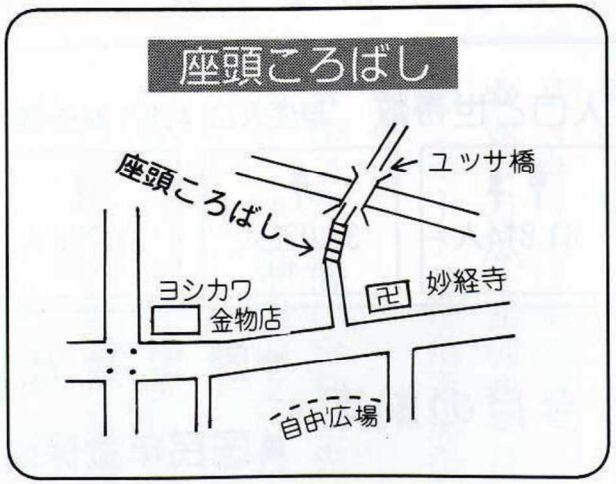
座頭ころばしと、ユッサ橋、この坂は、守谷舘から中宿に通じる坂道である。

江戸時代は、越後高田領で中宿庄屋の矢吹家へ通じていた。この坂は岩盤を切り崩してつくった坂のため、急な石段になっている。年寄りや体の弱い人の通行が困難なところから、座頭（按摩（あんま））ころばしの名がついた。

ユッサ橋は、仮設の木橋で洪水のたび流されたが現在は永久橋になった。私が子供のころは、冬に雪が降ると、この坂も近所の子供たちの楽しい遊び場になり、竹スキーや竹橇（そり）を持って雪すべりをしたことを思い出す。

永山倉造

ユッサ橋上から座頭ころばしを望む



妙見五差路から馬町方面を臨む

須賀川の坂 ⑪

十二軒坂

牡丹園方面から妙見五差路を左手旧道へ入ると、すぐに坂になる。これが十二軒坂である。

この坂は、馬町に続く坂道で両側には、ササラ(竹製のブラシ)やおけ屋、笠屋、車大工、茶屋(食堂)など、十二軒の職人が店を構えていたという。

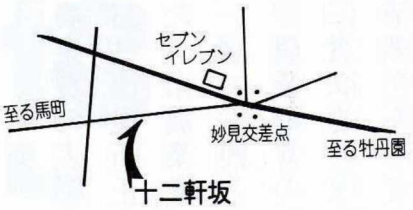
また、この坂道は水戸街道の出入り口に当たり、交通の要地でもあった。

元禄二年(一六八九)、おくのほそ道を歩いた松尾芭蕉も、この坂を下って石川の滝(乙字ケ滝)へと向かった。乙字ケ滝には、「五月雨の滝降りうずむ水かさ哉」の句碑がある。

二十年ほど前、国道一一八号がこの坂の北側に新たに通過し、今では、当時の隆盛は見られないが、親しみのある坂である。

永山倉造

十二軒坂位置図



現在では車道と歩道が整備され、板碑だけが当時の面影を残す白石坂

須賀川の坂 ⑫

白石坂

須賀川駅から下宿地内を北へ向けて進むと、途中から坂に入る。この坂が白石坂である。

江持方面から下宿方面を眺めると、白い坂のように見えたところから、この名が付いたという。

約千二百年前の奈良の都から仙台の多賀城まで続いている道である。前田川の広町地内から町の東部台地を通り、仲ノ町の「岩瀬の渡し」(現在の中宿新橋の所)を越え、東北地方最大の岩瀬森古墳(現在の鎌足神社)を過ぎると、東に岩瀬富士(宇津峰)が見える。

このころ、須賀川に石背国(いわせのくに)の国府が置かれ、国司に摂津国高槻(せつつのくにたかつき)(大阪府の北東部)の豪族、高槻左大弁が任命され(「白河風土記」による)、赴任して六年の任期を務めた。

永山倉造

須賀川の坂 ⑬

赤坂

赤坂ニュータウンへ通じている赤坂

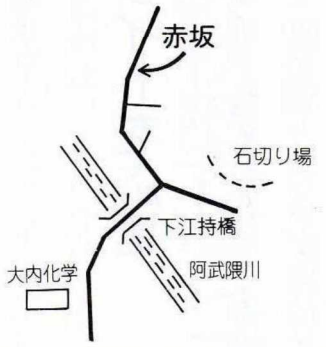
赤坂は、江持地内から郡山市田村町守山へ通ずる坂道である。江持橋から通ずる上り道で、当時は急な坂であった。

この坂は、古墳時代から奈良時代にかけて赤土層に造られたもので、赤坂遺跡（現在の赤坂ニュータウン）に通じていた。この古墳からは、翡翠（ひすい）の曲玉（まがたま）が発見された赤坂三号墳がある。ここに埋葬された人は、阿武隈川沿岸を支配した豪族と考えられ、曲玉のほかに数百点におよぶガラス玉が出土している。

ところで、夕日に映える様が川向かいの白石坂（先月号で紹介）から赤く見えたことから、この名前が付けられたとも言われているが、その真相は今だに定かでない。いずれにせよ、歴史的な背景を探る坂の一つにあることには違いない。

（永山倉造）

赤坂位置図



須賀川の坂 ⑭

天王坂

上野から母畑街道を下がると、左手に東公民館が見える。さらにこの前を進むと坂になる。これが天王坂である。

根岸方面から望む天王坂

切り通し道の右手に、天王様の石の祠がある。この神様は、須佐之男命とされているが、午頭天王として祭られ、地元では「きゅうり天王」と呼んでいる。これに関する伝説がある。その昔、岩瀬彦命の屋敷にきゅうり畑があった。ある年、病気がまんえんしたので、そのたたりを鎮めようと畑で採れたきゅうりを供えて午頭天王の霊を祭ったと伝えられている。

須賀川の夏祭りは、きゅうり天王祭りから始まる。この神様は、インドの祇園精舎の守護神を午頭天王として祭ったものである。日本では、午頭天王と須佐之男命の事柄が似ているところから、天王社の祭神は、須佐之男命を神社としている。

永山倉造

殿様清水から築後塚方面を望む

須賀川の坂 ⑮

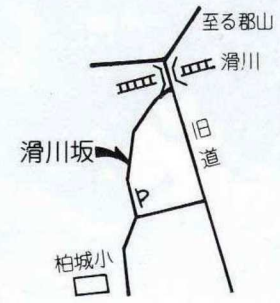
滑川坂

下宿から白石坂を登り、滑川地区入り口の稚児(ちご)が塚(築後塚)に立つと、安達太良山が見える。

この塚は、須田天仙丸(すだてんせんまる)とともに戦った少年隊の首塚と伝えられている。吉田、野川、江藤、石井、高久田、佐藤、有馬、永山、川井などの名が寺の記録に残されている。

この塚から下り坂(滑川坂)になる。途中、左手に兜岩(かぶといわ)がある。その下からは清水がわき出し、江戸(東京)に出仕(しゅつし)する大名行列も、ここで休んだり宿泊したりしたという。このことから、この清水を「殿様清水」と呼んでいる。

旧滑川村に入ると、道の両側に民家が並んでいる。古い宿場の名残である。今でも、「字東海道」、「字茶屋前」、「紅宿」などの旧地名に、赤い紅をつけた宿場女郎の面影が忍ばれる。

永山倉造

滑川坂位置図